

健康科学部における修学支援の試み

—学生の多様化に対応する個別的アプローチ—

北野庸子^{*1}・若林菊雄^{*2}・西原留美子^{*1}・岩田香織^{*1}

Developing Services for Students with Disabilities in the School of Human Sciences —Individualized Approaches to Answer to the Diversity of Students—

Yoko KITANO ^{*1}, Kikuo WAKABAYASHI ^{*2}, Rumiko NISHIHARA ^{*1} and Kaori IWATA ^{*1}

〈抄録〉

高等教育は少子化の中で近く「全入学」の時代を迎えると言われる。入学者の中には勉学の目的が明確でない、基礎学力・勉学の意欲に欠けるなどの傾向がみられ、高等教育機関は学生の多様化にどう対応するかが課題の一つとなっている。健康科学部では、2011年の秋学期から「気になる学生」の調査を行うとともに、修学支援の試みを開始した。修学につまずく理由は様々で、履修プランが立てられない、実習への不安がある、基礎学力が低く勉学態度も作られていない、ゲームやバイトへの依存で生活リズムが乱れる、メンタルヘルスの問題等、多様な要因が絡んでいた。学生の状況に合わせた個別的支援（面接相談）は、学生が直面している課題の理解、問題解決方法の検討、モデルの提示などをしながら、学生の自己選択・決定に基づきながら問題解決にあたった。このような修学支援活動を通して、学生達が修学につまずく要因、支援の方策、今後の修学支援の課題などを明らかにする。

Key words：高等教育、修学支援、合理的配慮、個別的アプローチ

I. はじめに

高等教育への入学者は、対象者人口の57%を超え、近い将来「全入学」の時代が来ることが予測される。このような流れの中で学生の中には、勉強の目的が明確でない、勉強の習慣がなく単位が取れない、資格を取ることに意味が見えず卒業後のビジョンが持てないなど、修学に困難を抱える学生が増加傾向にある。

2011年度に健康科学部長が修学に困難を抱える学生の実態を明らかにすることを提案し、社会福祉学科の障害学生支援委員会が修学に関して「気になる学生」の調査を行った。結果では、約8%の学生がその中に含まれた。この結果を受けて、学生の教育環境の改善を目的として修学支援の活動が開始され2012年11月で1年になること

から、本活動の目的、方法、結果を示し、今後の課題について考察する。

II. 高等教育における修学支援

「全入学」に近い時代を迎えた高等教育が直面している課題の一つが障害のある学生の増加である（石田、天野、2011）。日本学生支援機構の調査「大学、短期大学及び高等専門学校における障害がある学生の修学支援に関する実態調査」（2012）によると、2011年度の障害学生数は10,236人で、障害学生在籍率（障害学生数÷学生数×100（%））は、0.32%となっている。同機構が行った2006年の調査では、障害学生数5,444人、障害学生在籍率は0.16%であるので、約5年間の間に障害学生数と在籍率はともに約2倍になっている。

*1 東海大学健康科学部福祉学科（Department of Social Work, School of Health Sciences, Tokai University）

*2 相模大野こころの相談室（Sagami-Ohno Counseling room）

高等教育に在籍する障害学生の支援として、近年、発達障害をもつ、あるいは発達障害の診断はないが、この障害が疑われ支援を必要とする学生への対応が問題となっている。2004年の発達障害者支援法第8条第2項で「大学及び高等専門学校は、発達障害者の障害の状態に応じ、適切な教育上の配慮をするものである」との規定が置かれた（仲、2009）。日本学生支援機構が実施している調査対象となる発達障害の定義を見ると、2006年度は「診断書をもつLD、ADHD、高機能自閉症およびアスペルガー症候群」とされていたが、次第に「社会情勢を鑑み発達障害の診断書はないが、発達障害であることが疑われ、学校が何らかの支援を行っている者（区分不明・配慮有）」のカテゴリーでき、ここに属する学生数は増加傾向にある。このような学生を「障害学生」として扱うことの是非は議論の余地があるが、修学に困難を抱えるという点では、支援を必要とする学生達である（高橋、2010）。

本学部の修学支援は、次のような学生を対象とした。身体障害・発達障害などがあり、修学の継続をするためには支援を必要とする学生（診断書の有無は問わない）、障害の有無に関係なく、修学が足踏み状態で支援を必要とする学生などである。

また修学支援とは、大学は基本的に修学を目的とする教育の場であることから、支援の目的は、学生が適切に単位を修得して修学を継続できることとした。修学が足踏みする理由は様々であり、支援の方法も教育的、心理社会的、福祉的支援が予測された。

Ⅲ．方法

修学支援員（精神保健福祉士）を配置し、修学に課題を抱えた学生の相談に対応した。相談は、2011年12月から開始され、相談日は、原則として火曜日・木曜日の9時から17時の間。その他の曜日・時間については、利用学生の希望に合わせて柔軟に対応した。相談時間は、おおむね1時間。相談の利用の方法は、指導教員、障害学生支援委員会委員、科目教員などからの紹介及び紹介なしでも利用可能。相談場所は、3号館4Fの準備室を使用。また、学生相談室、健康推進室、教学課などの関係部署にチラシを配布し、関係部署との連携を模索した。

修学支援の流れは、教員他からの紹介または自分で来室した学生に面接をし、直面している課題の確認、修学支援の利用意思の確認、問題解決方法の検討・提示、解決方法を自己選択、行動計画の検討、行動のモニタリング、問題解決方法の再検討、修学相談の評価、帰結とい

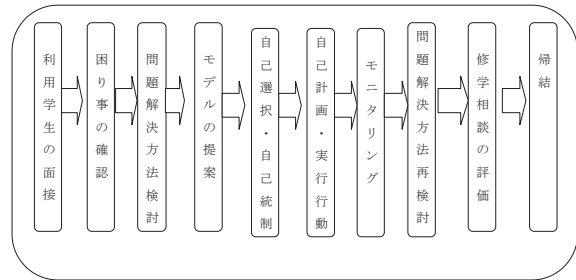


図1 修学支援の流れ

う流れである（図1）。

修学支援は、利用学生の価値観や自尊心、個人特性を尊重し、より豊かな学園生活と学生それぞれの自己目標の実現に向け、本人が持っている能力が発現できるような信頼関係の構築に配慮した支援を心掛けた。また、利用学生の個人情報と自己決定に配慮し、利用学生が自己を模索し、成功体験が積み重ねていけるような共同作業として取り組んだ。

Ⅳ．結果

1. 利用実績

これまでの利用者数は、2011年度4名、2012年度は6名（7月現在）、その内の1名が利用終了し、現在は9名の学生が利用中である。その内訳は、男性が6名、女性が3名、学年別では、2年生1名、3年生6名、4年生2名。すべて社会福祉学科の学生である。実習については、実習済みが1名、この夏休み実習者が1名、来春実習予定者が3名、実習をしない学生が3名、次年度実習予定が1名である。

このほか、2012年度、教員と来室するも利用しなかった学生が2名、教員から修学相談を利用するよう勧められるも来室しない学生が数名、チラシを見て来室するも、利用しなかった学生が1名、利用検討中の学生が1名いる。

紹介先は、2011年度は、すべて障害学生支援委員。2012年度利用の学生6名（1名終了）は、障害学生支援委員から2名、指導教員3名、学生相談室経由が1名である。

2. 具体的な相談内容

相談の内容は、学習上の問題に留まらず、実習、進路・就職問題、対人関係、生活リズム、健康管理、アルバイト、家族関係、住宅問題など個別的、かつ多様であった。また、相談は、履修登録期間、定期試験前後、実習の前後、夏休み前に増加した。表1は、具体的な相談

表1 具体的な相談内容

	学習に関する内容
学習	授業についていけない、ノートがとれない、発表するのが苦手だ
単位不足	課題がよく分からない、論文が苦手、課題提出に間に合わない、欠席が多い
資格取得	どんな職業に活かせるかよく分からない、資格を活かせる場所がわからない
定期試験	暗記テストは苦手、テスト範囲が広くどこから手につけていいかわからない
課題提出	課題の内容・課題のまとめ方が分からない、資料が集められない
提出期限	提出日を忘れてしまう、提出日に間に合わない、提出場所を間違えた
	実習に関する内容
実習前不安	不安が強い、緊張している、やり終えるか心配、迷惑をかけるのではないか
実習前準備	実習アンケート、指導教員、実習先選択・実習時期・事前見学の不安
実習後FB	実習中のつまずき・挫折、抑うつ、引きこもり、卒業・就職不安
利用者理解	利用者の気持ちがよく分からない、対応が分からない、利用者との会話不安
	対人関係に関する内容
援助要請	相談に行けない、予約がとれない、本音で相談できない、学内に居場所がない
問題解決	困ってもどうすべきか分からない、誰にも相談しない、ストレス対処ができない
	進路・就職に関する内容
進路・就職面	将来のことが不安、どんな職業につくといいかわからない、勉強と就職がつながらない
	生活管理に関する内容
日常生活面	生活リズムに波がある、朝起きれない、授業に間に合わない、昼夜逆転
	メンタルヘルスに関する内容
メンタル面	とても不安だ、気持ちがすっきりしない、気持ちが落ち込んだ、億劫だ
自己肯定感	自分に自信がない、今の自分に満足感がない、ダメな人間だ

内容を示す。

3. 具体的な支援内容（スキルの獲得）

今回の修学支援では、図1で示したように、利用学生の希望や学習方法、自分が考えている解決方法を支援者が聴いたうえで、必要に応じて、支援者から提案できることがあれば提案し、その提案された内容の中からどの方法を選ぶかを学生自身が自己選択・自己決定し、実行行動を起こし、その結果どうなったかを確認、解決方法に問題があれば再検討といった流れをとった。

また、支援する上で重要とした点は、支援の目標の一つを、学生が修学を継続するために必要とされるスキルの獲得においたことである。つまり、対人関係、日常生活、健康管理、ストレス対処、問題解決といった社会的スキルの獲得である。例えば、試験やレポートの準備に課題を抱えている学生に対しては、試験やレポート準備のための情報の集め方（インターネット、図書館）、友達からの情報の得方、過去問の利用法、締め切りまでの予定の立て方など、準備のための時間の使い方、睡眠時間の調整、援助要請の仕方、学習環境の確認など、より具体的なスキルを提示・提案した。表2は、具体的な支援の内容を示す。

4. 修学支援の効果（行動や考え方の変化）

修学支援の効果に関しては、ケースの多くが継続中の状態であること、また客観的な効果測定が難しいことから、修学支援が特に必要とされた履修プランの作成、実

習、資格・進路について、学生の発言や行動の変化を記述する。

1) 履修プランの作成や学習の継続、単位不足が問題化した学生たちの変化：

「次学期履修科目の見通しが出てきた」「4年までの見通しが出てきた」「将来のことが話せるようになった」「遅刻・欠席が減った」「課題提出日を守れるようになった」「先生や友達に相談ができるようになった」など。

2) 実習への迷いから不安・抑うつが強くなり、登校できなくなり、単位修得が難しくなった学生の変化：

「実習をしなくても卒業できることがわかり少し安心」「資格を取らないで頑張って卒業したい」「抑うつ気分が改善してきた」「生活リズムを整えたい」「登校したい」「友だちや先生に相談する」「施設でボランティアをしてみたい」など。

3) 資格・進路選択に迷い、単位は取れている学生、あるいは単位が取れていない学生の変化：

「ハローワークに行ってみたい」「アルバイトを経験してみたい」「求人情報サイトで検索している」「湘南校舎の科目を受講し資格検定試験を受験したい」「教養の幅をもっと広げたい」など。

このような学生たちの発言のなかに、自己効力感¹⁾の高まりや自信が感じられた。また援助要請、職業選択、情報収集、将来への見通し、社会貢献などに前向きな関

表2 具体的な支援の内容（スキルの獲得）

	学習に関する支援
学習の仕方	ノートの取り方、マーキング、時間管理、資料収集、仲間に相談
単位不足	授業出席支援、提出日の厳守、課題の内容確認、過去問題利用
学習援助要請	科目教員への相談確認、欠席時の授業ノートを手に入れる方策
授業出席	就床・起床対策、遅刻しても授業に出る、1限に遅れても登校する
授業環境	安心できる席確認、周囲の雑談の有無の確認、教員の声が聞こえるか確認
自主学習環境	図書館、空き教室、パソコン室、学生食堂、自宅、学外図書館
履修対策	得意な科目・興味関心、資格取得有無、次期履修対策、湘南校舎科目選択
次期履修対策	既取得単位合計確認、今学期取得見込み単位確認、必修科目確認
湘南校舎科目	パソコン室でシラバス検索、副専攻科目の検索、興味関心科目の選択
資料収集	インターネット活用、図書館での検索、関係機関の活用
時間管理	時間管理表・予定管理表の活用、メモの取り方、予定確認行動の促進
援助要請	研究室に相談に行く、相談の予約をとる、予約の取り方
	実習に関する支援
実習事前	実習先・実習期間の確認、実習イメージ支援、実習指導教員との関係
実習前準備	生活リズムの改善、日常生活支援、メンタルヘルス支援、予定・交通機関確認
実習スキル	服装、挨拶、出勤態度、会話、勤務態度、援助要請、施設理解、他者理解
実習後FB	実習中の課題、不足のスキルの明確化、卒業後の就職の考察
	対人関係に関する支援
援助要請	相談要請の仕方、部活やゲーム仲間に授業の相談、
居場所	学内の居場所探し、自主学習の居場所、休憩・昼休みの居場所
	進路・就職に関する支援
進路・就職	資格を生かせる事業所案内、具体的な仕事内容の紹介、関係機関の利用法
就職・職種	先輩の職種・職業の案内、就職先の施設、給料、待遇の検索
機関利用	ハローワーク、障害者職業センター、障害者職業能力開発校などの情報提供
	生活管理に関する支援
日常生活面	睡眠環境調整、起床時間管理支援、食生活・健康管理支援、夏休の過ごし方
福祉制度利用	障害者手帳、障害年金、自立支援医療の制度、自治体福祉サービス他
	メンタルヘルスに関する支援
メンタル面	学生相談室への案内、指導教員・実習担当教員への相談

表3 具体的な行動や考え方の変化

	学習に関する変化
学習面	学習意欲が出てきた、ノートをまとめるようになった、早く取りかかった
単位不足	提出期限に間に合うようになった、授業に出ることができるようになった
テスト対策	早く取りかかるようにした、過去問題を友達から借りることができた
課題対策	締切日を確認している、予定管理表を利用している、先輩に相談できた
定期試験	他の学生に過去問題や試験の傾向を聞いてみたい、今学期は自分でできる
履修登録	湘南校舎の興味関心・検定試験などの科目選択、次期履修登録への見通し
次期履修	卒業に必要な単位数、今学期取得見込み単位数、不足単位数、修得見通し
資格取得	資格を取らないで卒業できることが分かった、湘南校舎の授業を取りたい
	実習に関する変化
実 習	実習先のことを調べている、ゼミの先生や先輩に相談できた、頑張ってる
実習直前	起床できるようになってきた、実習先情報を自分で探している、頑張ります
ボランティア	夏休みにボランティア活動をしてみたい、ボランティア活動が楽しい
	進路・就職に関する変化
進路・就職	障害を活かしていきたい、先輩・部活の友達に相談することにした
進路情報	インターネットで調べてみたい、湘南の高校時代の友達に相談してみる
就職行動	施設の見学をしてみたい、夏休みにハローワークに行ってみたい
	生活管理に関する変化
生活面	早く寝ている、朝起きれるようになった、生活リズムがとれるようになった
	対人関係に関する変化
対人関係	相談ができるようになってきた、自分の考えを話せるようになってきた
発 表	それほど緊張しなくなった、発表に少し自信がついた、深呼吸をする
援助要請	自分から教員に電話した、研究室に相談に行った、相談の予約をした
	メンタルヘルスに関する変化
メンタル面	相談でき気持ちが楽になった、前向きな気持ちになれた、意欲が出てきた
自己理解	自分の長所・短所が分かってきた、障害を活かした仕事につきたい
自己肯定感	やればできることが分かってきた、あきらめないことが大切だ

心・意欲が出てきたことが推測できた。表3は、具体的な行動や考え方に変化が見られた項目と内容である。

V. 考察

1年間（2学期間）の修学支援の活動のなかで、修学支援を利用した学生達が直面している問題や課題を整理し支援のポイントを示す。

1) 履修プランの作成における困難性

- ① 入学・進学動機が曖昧である。「親が決めたから」「第一志望ではない」「とりあえず入学」などから、積極的に履修プランを立てていくための動機性が低い。
- ② 進路動機が低い。「将来、どんな仕事につくのか見当がつかない」「進路選択において、資格を取るこの意味が分からない」「社会福祉士、精神保健福祉士の資格は取りたいが、資格が将来自分のためになるのか？」など、直面する勉学と資格、さらに職業へのつながりが持てない。
- ③ 資格を目指さない場合の履修プランが分からない。「湘南校舎の科目履修は、いろいろな制約があり取りにくい」「湘南校舎のクラスの情報が得られない」「湘南校舎の授業に行ってもネットを見なさいと言われた」など、資格科目を履修しない場合の履修プランが作りにくい。
- ④ 履修における自己選択の戸惑い。「高校では科目が決まっていたが、大学では『自分で決めて履修登録をしろ』と言われても分からない」など、高校から大学に移行する際の変化に対応できない。
- ⑤ 履修登録手続きの不手際。「あわてて履修登録したので間違えて登録した」「登録していたのに忘れていて授業に出なかった」「湘南科目の抽選時間に間に合わなかった」「先行履修条件などの履修上の制約が分からない」など、システム利用の不手際。

2) 学習行動の問題

- ① 基礎学力の問題。「授業の内容がよく理解できない」「課題をどう解くかわからない」「図書館でどう調べたらいいかわからない」など、基礎的な学力不足と学ぶためのスキルを持っていない。
- ② 学習行動の問題。「計画を立てて、優先順位をつけて勉強できない」「一夜漬けで対応する」など、達成可能な目標を立てられず、効果的に時間を使って学習を進められない。
- ③ 一人学習の習慣や相談しない主義。「自宅の方が落

ち着いて勉強できる」「他の学生を意識して、学内では勉強できない」「学食では、人の目が気になり勉強できない」「自分は相談しない主義」など、学習環境に影響されやすく、困っていても問題解決スキルを使わない。

- ④ 高校までの学習態度の継続。「怠け癖・諦め癖があった」「勉強しなくても何とかなった」「遅刻・欠席が多かった」など、大学入学後も高校時代に習慣化された行動が継続している。

3) 生活リズムの維持が困難

- ① 睡眠時間が適切に取れない。「朝、起きられない」「欠席しないように、時間通り起きれない」「昼夜逆転している」など、規則的な生活リズムを持って生活できない。
- ② 時間管理・予定管理ができない。「夜中、遅くまでネット・ゲームをする」「約束を忘れる」「計画的に勉強できない」など、時間や予定の管理が上手にできない。

4) 実習への取り組みの不安

- ① 実習に行くことへの不安。「実習先の選択に伴う不安」「厳しい施設ではないか」「利用者やスタッフとコミュニケーションがとれるのか」「実習のことが気になり登校したくない」など、対人関係への不安、自信のなさや失敗への恐れなどから、回避行動がみられる。
- ② 実習中・実習後のつまずき。「実習先の利用者と全くコミュニケーションがとれなかった」「実習指導者に自分の気持ちや考えをうまく伝えることができなかった」「他の学生に会いたくない」「大学に来られない」など、コミュニケーションスキルの問題、対人関係の不安や回避行動がみられる。

5) メンタルヘルスの不調

- ① 不安・抑うつ傾向がみられる。「体がだるい」「気分が波がある」「やる気が出てこない」「自信がない」「他人の視線が気になる」など、利用学生の中には、学習のしづらさに加えて、メンタルヘルスに課題を抱えていることがある。
- ② 実習のつまずき・失敗体験が引き金。「自信を失った」「友達に会うのが怖い」「昼休みを過ごすことが苦痛だ」など、授業出席や学内にいることが苦痛になり不登校に陥る。

6) 進路選択の見通しがつかない

「目先のことで精一杯で半年先しか考えられない」「将来の見通しが立たない」「実習を受けるか迷っている」

受け止め、理解し、褒める、励ます、支えるというよう
な心理・社会的支援が重要であると考え。特に褒めら
れる経験の少ない利用学生にとって、「よく頑張った
ね」「一緒に頑張ろう」「連絡をきちんとしてくれて嬉し
かった」といった、労い、励まし、嬉しいといった気持
ちを、タイムリーに具体的に伝えることは、利用学生を
勇気づけ、修学上の意欲を高める心強い支援となるであ
ろう。このような心理社会的支援の中で、学生それぞれ
が、得意な分野、興味・関心がある分野へチャレンジし
ていくことが期待できる。

修学支援は、利用学生自身がその中心にあり、自分が
抱えている課題を多方面からの支援を学生自身が取捨選
択して受け、修学困難の状況から自立していくことにあ
る。主人公である利用学生の自己決定を尊重する支援で
あることから、学生が望まない行き過ぎた支援や、学生
にとって代わって行うといった代理行為は、慎みながら
支援していきたい。

高等教育における修学支援については、どこまで支援
を行うかという問題が指摘されることがある。この点は、
障害者支援において、どこまでを「合理的配慮」とする
かという問題提起と共通する点がある。1年間の修学支
援の活動からこの点を考察すると、明確な線を出すこと
は難しい。今後、個々の学生に即した個別的支援の経験
を積み上げていくことから修学支援モデルが明らかにな
り、さらにそのモデルの修正を繰り返し行う中で、修学

支援の全体像が明確になってくることが期待できると考
える。

注

- 1) 自己効力感とは「人が何らかの課題に直面した際に、こ
うすれば上手くいくはずだという期待（結果期待）に
対して、自分はそれが実行できるという期待（効力期
待）や自信、確信をいう」。Bandura.A Social Learning
Theory. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall 1977
- 2) 復権とは「ある人を再びその人の真の価値・能力にふさ
わしい地位・環境に置くこと」。(上田敏、リハビリ
テーションの思想 1987)
- 3) 自己肯定感とは「自己に対する評価感情で、自分自身を
基本的に価値あるものとする感覚をいう」。(有斐閣
「心理学事典」)

参考文献

- 石田久之、天野和彦（2011）：「高等教育機関における障害学
生支援の動向（Ⅲ）「筑波技術大学テクノレポート」18
（2）
- 高橋知音（2010）：「発達障害の理解と支援を考える」臨床心
理学（2）、金剛出版。
- 仲 律子（2009）：「大学における発達障害学生への支援につ
いての一考察」『鈴鹿国際大学紀要』16、pp71-87.
- 日本学生支援機構（2007）（2008）（2009）（2010）（2012）：
「大学、短期大学及び高等専門学校における障害学生の
修学支援に関する実態調査結果報告書」独立行政法人日
本学生支援機構